

宮田登著<民族研究と被差別部落－ケガレの民族史より>

この話はⅢで終わりにしようと思ったが、本をパラパラめくっているとやめられない、止まらないと、歌の文句じゃないけれど、気になるところがまた出てくる、また書く、ということなり・・・先生方の話をしていると、「賤民」と一口にいうけれど、時代によって場所によって違うということ、まだまだよくわからない事があるということ、それと先生方の意見もまたそれぞれ違った部分があるということ、そんなことがわかってきた。

賤民とは、良民とか常民と言われた農業者以外の人全部が入るのかもしれないということ。もちろん皇族貴族、僧侶神官その類の人たちは範疇に入らない。河原の者、散所の者、坂の者、などと言葉は出てくるが、時代によって場所によって違うということがある。牛馬の死体処理を仕事とする人たち、身体障害者の集まり、一般市民になりきれない放浪の民、こういう人たちを区別、差別し、「あいつらは 非人だ 賤民だ」としたのだろう。汚いものということで、世界中の無数の人がいる、その人たちの日々の生活で出る汚いもの、ごみやら、排泄物やら、数え上げたらきりが無いそれらの処理が、問題はあってもにせよ、本当は問題なんだが、なんとか循環している。

◎冠婚葬祭という特別な年中行事が一年にならして約 50 日程度ある。特に祭りに関する日が設けられている。この特別な日をハレと表現している。そういえばオレも、「ハレ」とは意識していなかったが、日々の流れの中で、「この日は」「明日は」と意識する日が年のうちで幾日かあったが、いつのころからかそういう日は少なくなっていった。「絵を描くこと 山に行くこと 以外は知らないよ」なんて気ままな生活をするうちに、その他の日が、「ハレ」であろうが、「ケ」であろうが、気にしなくなった。と格好よくいうが、うじうじ気にすることもあるかな。

◎ハレのひとつである葬式の儀式で重要なのは、死者を蘇らせる呪術、つまり通夜の儀式である。古事記・日本書紀には、それはモガリと記され、特定の建物の中で、遺族は七日八夜遺体の前に持して、どんちゃん騒ぎをつづけ、いったん離れた死者の靈魂を呼び戻そうとした。これが終わって野辺送りの行事、地域を離れて靈魂がさ迷わないよう、いろんな供養の方法があり、仏教的な儀式が生かされている。葬式を不浄視することは常識化しているが、古代から中世にかけて神社、神道が不浄なものを排除する、血穢、死穢に対して敏感になっていった。

◎修験道での女性排除。オレは何度か、大峰山にある「結界門」をくぐってその中を通った、普通に通っていたが、そういえば女の人はいなかったという感じだった。かつて、何人かの人、男の恰好をした女性やら、人が少ない、管理者がいない、冬の季節に通過したことがあるらしい、「やったぞう」と雄叫びならぬ女叫びをそっとあげている人がいたとか。結界門の前には、管理している寺が書いた看板に、くどくどと言いつつならぬ説明文があり、女性は遠慮してくれと書いてある。

◎山は女の神様、狩猟者は女の山の女神様を崇める風習があった。山岳修行者たちは女性を排除していった。山の女神を山姥、鬼婆、鬼女というような妖怪に仕立て上げていった。ここで、オレが先日登った戸隠高原の話が出てくる。古代末期、戸隠山の山岳修験者である男性宗教集団と、鬼女紅葉や、「おまん」と称する女性たちをリーダーとする宗教団体とが激しく対立していた。

◎戸隠山に鬼がおり、平これもちによって成敗された。能、浄瑠璃、歌舞伎、では、「紅葉狩り」という題名で描かれた。会津で生まれた紅葉は、美貌と魔王から授かった力を使って、源経基の寵愛を受けるが、奥方への呪詛が発覚して戸隠に配流される。紅葉は超能力を使って村人の信仰を集めるが、やがて人を食い鬼女となった。

◎古代には女性司祭者が巫女として祭りを行ってきたが、中世以降男性司祭者がそれにとってかわった。男性中心の中央の権力と、地域の女性中心の自主的な民俗との対抗関係がある。そこに民俗文化がある。仏教の場合でも、高僧・名僧の優れた教えや仏教理論と、教団に属さず聖と称した遊行僧の説く教えとの緊張関係がある。遊行僧は、死穢を忌避する村人たちの間にあって、死体を埋葬、供養した。

◎遺体処理を中心とする人々がしなければいけない儀礼を、それを超越できる人々に任せてしまおう、そういうところから、ケガレの仕事を被差別民に委ねる関係が生じ、差別の構造が生じてきた。

暑い暑い、異常な暑さの日が続いている。連日、オレのアトリエは 37 度 C を下まわっても 1 度ぐらいしか下がっていない。最近の気象庁の表現が少し大げさだと思うふしはあるが、それにしても 37 度が連日続くのは暑すぎる。「命にかかわる 危険な暑さ」という表現で、「水を飲め クーラーをつけろ」と注意喚起が続く。地震、大雨、台風、これらが終わってこの暑さの日々、「こらあ～ 人間の暴れすぎ ち～とは 遠慮せんかあ・・・」と小声で吠えているが、ひとの傲慢さはなかなか収まりそうにない。

七月初旬の大雨、今年は少し早く梅雨が明けるかと思った矢先、関東地方は梅雨明け宣言を出したばかりの翌日ぐらいから、梅雨前線が停滞し大雨が連日降り続いた。じゃじゃぶりの雨が二日三日と続いた、「この降り方はきついネエ」屋根にあたるじゃじゃぶりがちょっと気になった。嵐山の渡月橋が今にも水に浸かりそうな映像を見ながら、何年か前と同様に水没かと思ったが、今回はセーフだったようだ。茨木も河川氾濫警報が出てとか出なかったとか、知人の 80 歳の人のところには、「老人は早めの避難を」と言われたそうだ。安威川の、ライブカメラを見ている限り、水嵩は相当上の方だけれど、危険水位の赤いラインまで余裕があるとにらんでいた。何年か前、同じところを走っている最中に、雲行きが怪しいなと思ったとたんに、一転にわかにかき曇りと、何かで聞いた表現通り、じゃじゃぶりの雨が降り出した。たぶん上流も同じように降ったと思うが、ぐんぐん水嵩が増し、往路はそのまま走ったが、身体じゅうずぶ濡れになりながら、復路は土手の上にあがったことがある。安威川の河川敷は年に何度か水没する。雨が二日ぐらい続くと、水位が 1～2M ぐらいあがり、河川敷の遊歩道は膝ぐらいとか、子どもの背丈ぐらいは浸かってしまう。その程度の水嵩なら一日ぐらいでひいてしまう。

七月の大雨以降、毎日、夕方の 4 時半ぐらいに家を出て、安威川にやってきている。家を出るときはまだまだ陽が燦々と痛いぐらいに暑いが、自転車を止め土手の階段を上がって、反対側の河川敷に降りると、多少涼しいかなと思うぐらいの風が吹いている。先日の大雨の後遺症、水嵩が増し河川敷が水没した後には、砂利や泥やゴミが残っている、今回もたくさんものを置いていった。杭がずっと並んでいる、その杭に上流から流れてきたゴミがひっかかっている。中身というよりは杭の外身だが、草やら枝やらがずらり並んでいる、人が一人ずつ抱きついたような形でずっとずっと並んでいる。

この暑い日照りの河川敷にも二十人の老若男女がいる、歩いている、走っている、ラケットを振っている、ボールを投げている。ほとんどが毎日のように見かける。話かけはしないが、顔見知りの常連だ。川の中に浸かってはしゃいでいる子供たちもいる、「ちょっと汚いのでは ガラスなんかで怪我のないように」そういうオレも小学校時代はもう少し上流の安威のあたりへ、学校から泳ぎに連れて来てもらったことがある。足の立たない流れの早いところだったがクラス全員がバシャバシャ浸かっていた、今から考えれば、何に乗ってきたのやら、先生連が 3, 4 人はいたように思う。水中眼鏡越しにそこらあたりをすり抜ける魚がたくさん見えた。

草が茫々と言いたいが、そんなにないね、盛夏の今、緑は黒っぽく感じる。日照りの中では影の部分は真っ黒だ。河川敷付近の草は幼児が入っても頭が出そうなぐらいにしか伸びていない、もっとも中洲のススキは背丈の倍ぐらいにぐいぐい緑が騒いでいる。

毎日夕方の 5 時ころに河川敷にやって来るが、夕方この時間の夏の風、水のそばの風は意外と涼しい、ひゆるり、すり抜けるヒヤリとまではいかないが、多少とも涼しい、暑さを感じない風は気持ちがいい。街中の風、田んぼのまわりの風、そんな家のまわりで感じる不快でムツとする暖かさはない。1 時間もすると陽が落ち、さらに時間が経つと闇が訪れる。

アトリエに居て、窓を開け外の風を入れるが、夏は、窓の外の風は暑いだけの熱風、こいつが入ってきても涼しくはない、扇風機を回しても、室内の熱い風が回転するだけで、さほど涼しくはない。アトリエの風は、風鈴を鳴らすだけだけれど、「水のそばの風はいい 山の風もよし 自然はいいのだあ・・・」

エゴン・シーレ Egon Schiele 1890~1918 28歳で没 チェコ系オーストリア人 オーストリア・ハンガリー帝国のウィーンに生まれる(かつて、EUにこんな国があったとは知らなかった。この国がなぜできたのかという解説を読んでいると、すごいページ数にもわたっている、複雑な諸事情、たくさんの民族、というようないろんな経緯があったようだ。)ウィーン工芸学校でグスタフ・クリムトと知り合った。その後ウィーン美術学校に進学。なんとヒトラーがその翌年にウィーン美術学校を不合格になったとか・・・諸事情を見るに、オーストリアにおけるドイツの影が色濃くにじんで見える。

先日の地震で本棚が倒れた。断捨離も兼ねたたくさんの本を捨てた、その本棚にエゴン・シーレのデッサン帳が目につくところに乗っている。「エゴン・シーレだな・・・」とながらく無視していたが、ちょっと見てみようという気持ちでみた。「上手いね 感動するね すごい」人物デッサンに見入った。油絵の画集を持っていないのでネット検索、「油はもっという 黒の使い方が上手い すごい」ヨーロッパの伝統絵画を踏襲しつつ、個性を思い切り見せつける、構図がいい、感性がいい、色がいい・・・人間を描く場合、形の取り方、組み立て方、人体を特異な空間に組み立て、しかもその形状が魅力的で壘感的で官能的である。

ただオレはこの人の絵は好きじゃない、とせつかくの話の感動の盛り上がっている最中に腰を折るようなことを言っただけで申し訳ないが・・・ホルストヤンセンも同じように好きじゃない、好きな絵、絵描きじゃないが、絵はすごいんだよ、いいんだよ。28歳で死んでしまった、十歳代からどんどん描けた人だろうその感性と才能に乾杯である。それと写真を見ると、なかなかの美男子、これにはまいるね。

絵を見ていると、描いている作者の息づかい、筆を持った手、身体の位置、そんなことがどんどん伝わってくる。ほんまものの絵を前にできたらもっと伝わってくるのだが、いかんせん印刷物や、モニターの画面では、その伝わり方が少ないけれど、贅沢は言えない、目の前にほんまものがあるわけでもないのだから。

百年前に28歳で死んでいる、百年前と言えば我々が使っている画材、紙・絵の具・キャンバスはそう変わらない、むしろ純粹のものが多かったと思う。紙はまだ機械で作るより、手漉きの方が多かったのでは、今でこそ、手漉きは高級品と崇めているが、当時は手漉きしかなかった。絵の具も、現代の化学薬品の粉より、純粹な石やら砂やらの粉をすり鉢で砕き、油を垂らしては混ぜ、また混ぜ、手造り絵の具で描いていたのでは。

エゴン・シーレの兄貴分にクリムトがいる。工芸だのアカデミックな美術だのという言葉、そういえば昔聞いたねという言葉が出てきた。若いころ、美術学校には、絵や彫刻と工芸とデザインという分野があり、それぞれに、「オレはこれがしたい わたしはあれ」と最初からみなさん方向が決まっていたと思う。クリムトが工芸家だと言われたら、背景の処理がそうかもしれないね。エゴン・シーレは絵そのものだね。「じゃあ クリムトの絵は絵じゃないのか」と言われれば、「NO」である、あれも絵である。そんなことを言っていた時代から50年100年経ち、そんな言葉の区別にも時代を感じる過去の話になってきた。現代では、美術の世界も様変わりしてしまっているが、平面の絵画、絵、この分野はなくならないね、いや、無くなってもらっては困るね。

エゴン・シーレの油絵、母親とその胎児が描かれている。まっ黒な画面の中、画面上に女の顔が見え、その下に丸い区切り、その丸の中から胎児がこちらに向かって手を振る。その下にまた女の手が腹を覆うように置かれている。考えたねと思わせる構図、女の顔も手も節くれだって痩せているが力強い。胎児の役柄の赤ん坊はまるやかで可愛い。見た目はハッとするほどエキセントリックで鋭く怖いけど、よくよく見ると母親と赤ん坊の穏やかな表現だ、二十歳代でこんな感覚の絵が描ければいいことはないね。

丸山健二著<トリカブトの花が咲く頃>

ほとんど没我的な無の底に沈みっぱなしで

どこまでも影絵的でしかない孤独に

がちりりとざされていた

わが意識が

美的吸引力を豊かに秘め

閃光のごときひらめきの一瞬を得て

◎この感じで詩文が延々続いていく、作者の感覚が、ぶつくさ、華麗なるぼやきが続いていく、読んでいるものに、聞いているものに、心地よく響く。「どういうストーリーですか」と問われると、「さあ〜」と、ぼけるしかない。ストーリーも、話の接ぎ穂もいらぬのでは、とは、読みえないオレの負け惜しみ文句かな。

丸山健二はオレより三歳上のスキンヘッドのおっさんである。残念ながら細面の美男子である。出身が長野県飯山と知って、「おお 信州の人とは 知っていたが 先日行った戸隠の近所か」と余談。ブログがあり何年か前の文章を紹介。人心の文学離れ、ベテランのへたくそさに吠えている。

経済的繁栄と科学の発達によって、あらぬ夢と憧れを貪るしかない、何もなかった時代が遠のくと、つまり、ビジュアルの文化が台頭してくると、それしきのやっつけ作品や、劣等意識の裏返しでしかない憧れが見え見えのために、むしろ読んでいる途中で滑稽に感じ、作者のお粗末な憧憬が悲しく想えてしまう文学なるものが、馬鹿々々しくなり、映像によってがちりりと補強されたナルシズムへと流れて行ってしまい、あとに残った読み手は、稚拙であればあるほどそのナルシズムにのめり込んでいく、自己逃避型、現実逃避型、の異常にして異様な者だけとなったのです。<絵の世界も、人心の絵画離れ、著しいネエ。>

<略>真の小説、真の文学でないからそっぽを向かれてしまうのだ。

<略>権力好き、権威好きの、芸術家もどきたちがものする作品が、これとは思わせるほどの、魂をほっとさせられるほどの力を持っているというならば、いくらか気も休まるのですが、しかし、案の定というか、やっぱりというか、彼らの作品はお粗末に過ぎ、これが大のおとなの創作したものなのかと…と大御所やベテランを批判。

あらゆるむさぼりを離れた

人間らしい精神に反しない立場へもどってもらいたいと

いくらこいねがったところで

「絵は 相変わらず 好調である」と開き直っている。この好調であるという開き直りが、正解であるとか、威勢のいい欺瞞であるとか、不正解だとか、良いとか悪いとか、もうそういうことは考えまい。ただ単に好調である、納得がいく、身体の中を、気持ちの中を、サラリ流れていく、障りも棘も感じない、これでいいのではと安堵する一面、「違った仕事もしてみたい」とも思う。昔、「安定して 流れに沿っている人は 一度 流れを見つけてしまえば 流れて行けばいいだけ それが川筋なら 道程なら それでよし」とそういう風景を見ながら、次は、そしてその次はと、川の流れの、二俣三俣を探りつつ、揺れる浮草に身を任せ、上下左右に魂を置いていた。それは実に快感でよかったが、「オレの流れが 欲しい」といつも憧れの流れを見つめていた。「同じスタイルになりだしたら それで終わりだよ」と小声で吠えていた野良犬のごときが、猪口才な、「野良犬はそれで終わればいいのだよ 自分自身の道程など くそくらえじゃないのかね」とまた罵りの小声が聞こえる。

民衆史の遺産-妖怪-稲生物怪録（いのうもののけろく一ぶっかいろく という説もあり）

◎享保の頃、備後の国三次藩士に、稲生平太郎という人がいた。十六歳にして弟を養育し、権平という家来を召し仕へ暮らしていた。七月の三十日間さまざま妖怪に襲われたが、平太郎は勇氣凜凜、いささかも恐れることなく、ついに化け物は降参した。隣に権八というて、三十歳余りの力量優れたる男あり、背高く力もまさり、相撲を好み、三ツ井権八と名乗っていた。五月のある夜、この二人、勇氣について言い争い、肝試しをすることになった。肝試しで裏山に登ったのが五月、それから七月に入って奇怪なことがひと月間続く。この三十日間の話は稚拙この上ない、筋はわかるが、魔物なり妖怪なりの描写が、様子が見えてこない。また同じ日に二つ三つの事件が重なり、内容がよけいに散漫になる。実在の人物の話であると言っているが、この話、練り直して、創作できるご仁がいればいいのにねえ。ゲゲゲの鬼太郎師匠が、一部いただかれたとか聞かすが・・・これに比べ何百年も前の今昔物語集の素晴らしいこと。この話の元ネタが今昔物語集にあるというので調べてみた。第27巻13集「安義橋の鬼」ではないかな

今は昔、近江の守の館に元気な若者たちがいた。飲食をして話がはずんだ。「この国の 安義橋は だれ一人として 無事に 通ったことがない」「お館の名馬に乗れたなら 渡ってみせるぞ」「ならお前の根性を 見せてみる」引っ込みがつかなくなった男は、怖いなと思いつつ、仕方なく名馬に乗ってひとりで橋に向かった。ひとっこ一人いない付近で、橋に女が立っていた。「乗せて連れて行ってください」と頼む女を振り切り一目散に逃げた。たちまち女は鬼に変身して追っかけてくる。鬼の顔は朱色、巨大な琥珀色の目が一つ、身の丈九尺、指は三本、爪は五寸と鋭い、身体は緑青色、男は一心に観音を念じて逃げおせした。鬼は、「今日は逃げられたか きっと 会いに行くからな」と去って行った。男は陰陽師に相談し、「門を閉ざせ」と言われていたが、喪服を着た弟が訪ねてきて、「老いた母親が亡くなった」というので弟を招き入れた。弟は突然鬼の姿に変身し、男の首をぷつりと切り落とした。

◎権八は平太郎の家に来りて、嘶ける。よもやま話の末、互いの血気話になり、権八が、「今宵 比熊山に登りてお互いの根性を ためしてみんはいかに」「さらば 百物語をして後 比熊山に登らむ」百物語：百本の蠟燭をともし、一話ずつに蠟燭を消し、最後に妖怪が表れるという遊び。夜、平太郎は権八方に行けば、「待ちかね申したり」と兩人差し向かい、いろいろ怪談取り集め嘶ける。折から打ち続き降る五月雨の、今宵はひとしおやみもやらで、心細い。丑三つ：午前二時、平太郎は蓑笠を着て比熊山へ。平太郎山奥へ分け入り、見れども暗さはくらし、雨降り、狼の声かまびすしく、彼方此方まわりようよう古塚に印付け麓に帰ってくると、人の声、「何ものなる」「平太郎さまにてはなきや」とは権八の声。「お帰りの遅き故 お迎えに参りました」と、うち連れたちて帰りぬ。たがいに笑い分かれて帰ったが、ほどなく不思議の物の怪のありけるになっていく。

◎1日目：巨大な毛もくじらの手が平太郎を驚づかみにした。大男の目が開くと明るく、閉じると闇。権八の家にも、一つ目童子が蚊帳の外を回るだけで、権八は金縛りにあった。

◎2日目：行燈の灯が燃え上がり天井に届きそうになる。床に入るとざぶざぶ水が湧いてきた。

◎3日目：小さい隙間から女の生首が出てきて、平太郎をなめまわす。瓢箪がいくつも垂れ下がってきた。

◎4日目：茶を沸かそうとすると、茶釜が凍って開かない。朝起きると、棚上の紙が散乱している。

◎5日目：権八と話しているところに大きな石が這ってきた。よく見ると石の八方に指のような足がつき、蟹のような目が付いている。大きな石はその目で睨みつけながら、ガサガサ走り寄ってきた。

◎6日目：夜に薪小屋に行こうとしたら、目の前に老婆の大きな顔が小屋の戸口をふさいでいる。平太郎は眉間に小柄を打ち込んだが、痛そうな顔をしないので、そのまま捨ておいて寝た。

◎7日目：夜、大きな坊主が見える、権八が槍で突くと、槍を奪われ、その槍がこちらに飛んできた。

◎8日目：親戚のものが来て話していると、塩俵と高下駄が飛んできてフワフワ。客は慌て帰った。

◎9 日目：この夜は妙なことが起こった。亮太夫が、「この名刀で 化け物退治だ」と石臼の化け物に切りつけたが、刃がこぼれてしまった。「断りもなく 刀を持ち出し 申し訳ない」と腹を切って死んでしまった。そのあと、亮太夫の幽霊が出て、恨みをいう。

◎10 日目：化け物が懇意の友人に化けやってきました。話の後、友人の頭に丸い穴が開き、赤子が二三這い出した。

◎11 日目：話が三つ。親しい人たちがやってきましたが、妖怪が一人の刀の鞘を隠してしまった。すり鉢とすりこ木が勝手に回りだした。親しい女がやってきました話していると、盃がその女のあとを追いかけてまわした。

◎12 日目：押し入れから大きなヒキガエルが飛び出し、眠っている平太郎の床の上に這い上がってきた。

◎13 日目：友達が集まって話がはずんだ。「寺に災いを除ける道具があるそうだ」「ならばとりに行こう」平太郎と平五郎が藪のそばを通っている時、雷のように光る赤い石が平五郎にあたり、悶絶してしまった。

◎14 日目：話はふたつ。裏の臼部屋で、臼を搗く音が一晚中聞こえた。夜中天井いっぱい、巨大な老婆の顔が表れ、平太郎の顔をなめまわした。

◎15 日目：畳はもちろん、何もかもが、糊でも塗り付けたように、ねばねばする。

◎16 日目：田楽風に串刺しの、目の丸い小坊主の顔が、十三、十四ほど飛び出し、枕もとを跳ねまわる。

◎17 日目：友人たちがやってきました。机や菓子鉢が飛び回る。

◎18 日目：昼間は畳が、ことごとく糸で天井にくくり上げられ、夜は錫杖が飛び回り、じゃんじゃん鳴った。

◎19 日目：運八という者が妖怪にワナを仕掛けたが、見破られた。運八は、この有様を見て「狐やタヌキの仕業ではない 本物の化け物だ」とおそれいった。

◎20 日目：知人の使いと言って、美しい下女が、餅菓子を入れた重箱をもって見舞いにやってきました。女は絶世の美女で、平太郎は胸騒ぎを覚えたが、女はつれなく帰って行った。

◎21 日目：行燈を灯すと人影が写った。人影は書見台を前に、書物を繰り、なにかを講釈している様子。

◎22 日目：朝、ざあざあと音がする。「なにごとか」とみると、シュロ箒が居間を丁寧な掃きまわっている。

◎23 日目：平太郎の家に巨大なハチの巣がかかった。巣からは、赤い泡、黄色い泡が吹き出していた。

◎24 日目：大きな蝶が飛来し、柱に当たって砕け、数千の小蝶となって、あたかも風に桜花が散るかのよう、群がり飛んだ。夜には行燈がたちまち大きく燃え上がり、吾が身に燃えつかんばかりに思った。

◎25 日目：縁側から降りると、ヒヤリ、まるで死人を踏みつけたように感じられる。足元にいた青い大入道踏みつけていた。泥田に足を踏み込んだように粘りつき上がることもままならない。にちゃにちゃ気持ちが悪い。

◎26 日目：女の首が飛んできた。青ざめた顔、薄気味悪い目つき、女の手が、平太郎の身体を撫でまわす。

◎27 日目：夜になると、どこからともなく拍子木の音が鳴り響き、女の声やため息が聞こえてきた。

◎28 日目：無数の虚無僧が家の中にやってきました、尺八を吹いた。その音は耳をつんざかんばかりだった。

◎29 日目：平太郎が、「今日の趣向はなんだろう」と思っているところに、薄気味悪い風が吹き、星の光のようなものが表れ、蛍火のように粉みじんに吹き込んだ。

◎晦日：浅黄色の袴を付けた、四十歳ほどの男が表れた。平太郎が、「これぞ妖怪」と刀を抜こうとすると、かの男、「刀を振り回すのはやめていただく」といった。部屋の炉の蓋が開き、灰が吹き出し、高く舞い上がり、一つの塊に、やがて大きな頭になった。そのひたいに瘤がある。瘤がぶこぶこ動き、煙が出、ミミズが這い出してきた。ミミズを払いのけるが、いっこうにどかず、鳥もちのようにねばりつく。前方の壁に目や口が表れ、けらけら笑う。トンボの目玉のように飛び出した壁の顔が、青光りして、平太郎を睨みつけた。壁の顔が消え、さきの男が平太郎の眼前にあらわれた。「拙者は 山本五郎左衛門 と申す魔物 魔国の頭なり これまでに 85 人をたぶらかしてきたが 残念ながら 86 人目で わが家業は敗れたり そなたほど勇気のあるものはいない」その時平太郎のそばに、冠装束をした、平太郎を守る氏神が表れた。かの男は、「今宵限り」と頭を下げ、駕籠に乗り雲の彼方に消えて行った。この 30 日間さまざまな妖怪が昼夜姿を現したが、その夜かぎりその姿はなく、平太郎はあたかも夢が覚めたような心地であった。

◎16:00 樺平の駅に着いた。人の流れについて歩いているが、右も左もわからない、何度か来ているところなのに、皆目わからない、祖母谷温泉はどっちかな、水平道入口はどっちかな、明後日は何時に乘ればいいのか、荷を担いだままうろうろした。資料館のおっさんに聞き、「祖母谷温泉はあっち 水平道はこっちの階段」と教えてもらい確認した。階段上には、「健脚の人しか入れません」と書かれている、いきなりぐいぐい登って行く感じだ。切符は当日でないと買えないが、「明後日の午前は 間違いなく 乗れるでしょう」と駅員から聞いた。

◎荷はなるべく軽くと、食料は乾燥物を中心にした。なんだかまだまだ蒸し暑い、この暑さ、虫対策を持ってこなかった、これが後々、カイカイで悩まされる。小屋でテント2泊、風呂一日、計1800円を払ってテント場に降りた。温泉は鱒でも泳いでいそうな水槽に湯が流れている、露店風呂というが、まさに露店である。脱衣の場所には屋根とスダレがある。ジジイのテントが4張、一組は男女だが、そのテントは一人用の狭いものだ。

◎テントを張り、寝支度を整え、河原に向かって座っている。ソーセージ、レタス、途中で買った弁当などをつまみながらウイスキーを飲んでいる。いつも出向く安威川ぐらいの川幅だけれど、流れの速さがすごい、ゴウゴウと流れている。大雨の後は10Mぐらい嵩が上がり、小屋付近まで濁流が渦巻くのだろう。でっかい石がゴロゴロ流れ、テント場は水の底、というような風景が何年かに一度はあるんじゃないかなと想像する。もう20年以上も前かな、澤山・河瀬の3人で、白馬から降りてきた。やっとコンクリートが表れ、橋を渡りながら、板張りの小屋があったのを思い出す。たぶん白馬大雪渓を登った。白馬で小屋に泊まり、頂上に散歩に出かけたが、雷の音がゴロゴロ下の方から聴こえ、一瞬髪の毛が電気にあたって逆立った、「あわわ」と慌て小屋に下り降りた、「怖がりじゃのう」と二人から笑われたが、今までで電気を感じたのはあの時が一回きりである。翌日はぶらぶら3人で祖母谷温泉から、トロッコと地鉄を乗り継ぎ富山まで出た。列車はもうなくバスで帰ったように記憶する。同道した河瀬さん、まだ40歳前で、「運動が好き スタイルに自信がある」という。「写真を撮りませんか」と話はずんだのが楽しい思い出。「なんの写真・・・?」「スタイルが きれいに見える ポーズですよ」

◎2日目:6:00 水平道に向かって出発。昨夜は19時ころからうつらうつら、23時ころいちど目覚め、朝の4時にまたトイレ、4時の時点で満天の星だったが、5時にはもう明るかった。ここは祖母谷と祖父谷の合流地点、祖母谷から白馬岳へ、祖父谷からは唐松岳への登山口だ。

◎樺平駅で、昨日いただいたおにぎりを食べ、いよいよ登りだした。いきなりの急登、一つ目の鉄塔まで30分、陽は明るく照っている、雲もあるが青空も広がっている、朝の横からの光が斜面の緑を黒々と反射する、光の空間に舞っているたくさんの羽、おそらくトンボだろう。

◎3本目の鉄塔のあたりに、「ここから水平道」と記してある。この道は、まず樺平の駅から高度を上げ、ここから川沿いにくねくね曲がって上流に行くようだ。くねくねがすごいので、直線距離は稼げない。

◎「やっと 人に 会えた」向こうから元気そうな若者が嬉しそうにやってきた。散策というにはなかなか手ごわい上り下り、向こうを見ると木のない高い山々が見える。さすが信州、このあたりでも立派な山があるねえと思ってふと考えた。「あれは北アルプスじゃないのかな 祖母谷から 白馬 唐松に 行けるのだから それらのひとつ・・・」帰って地図で調べると、方角が東北東にそれらが見えたので、白馬の付近ではないのかな。

◎短いトンネル、石の山を武骨に繰り抜いてある。大正時代の工事だそうなので、この程度の石をくりぬく技術集団は、日本にたくさんいたのではと思う。手で掘ったとを感じる岩のトンネルだ。

◎なだらかな土色の斜面があるなど近づくと、雪だまり、下の方までこの谷筋が雪渓になっている、その上に枯草枯葉が覆っている。氷の割れたクレバスはまだまだ白い雪の塊だ。思い出した、これが長いトンネルのあるところだ。「ライトが要ります」テント場を出発するときに、「ライト 持ったよね」と確認したのが良かった、忘れていたらここで引き返さなければならなかった。トンネルの中は真っ暗け、「まだかいな まだかいな」と奥に入っていく、床は湧水でじゃぶじゃぶ状態、所々に鉄骨で支えてある、頭をゴツんと打ってしまった、バンダナをしていてよかった、岩の中ということで15度ぐらいの涼しさ、計らなかつたが長く感じた。あとから調べると、150Mぐらいあるそうだ。昔の人夫のあんちゃんたちは、どんなヘッドランプを持っていたのかな。

◎水平道は7.8年前に通っている。その時は数人で立山に車を止め室堂から劔沢小屋へ。みなさんは小屋泊、オレだけテント泊、翌日は、劔に登るみなさんと別れ、衣川さんと二人で途中テント泊、水平道を樺平まで行き、皆さんと合流して、トロッコ・富山地铁を乗り継いで、車が置いてある立山まで帰った。元気だったねえ。

◎トンネルを出たあたり、空中に丸太で足場の橋。「おお これは恐い だんだん迫力が出てきたね」もう3時間以上歩いているのに、トロッコの駅がまだすぐそばだ、谷筋の曲がりくねった道、なかなか距離が稼げない。阿曾原の小屋までと思っていたが、まだまだ時間がかかる、12時にはUターンと決めていたので、滝から少し来たところで引き返すことにした。

◎この道はダム工事の人夫が、重い荷、長い棒、工事の道具、食料等を担ぎ運ぶための道だったそうだ。今でも当時のそれらを運んでいる様子の動画が流れている。日本の高度成長時代、盛り上がっていた時代の話だ。

◎水平道の壁には針金の手すりが整備されている。なんと帰りは左手だ、右手より不安定だなと思いつつ、この針金の手すりは優れものだと賞賛、指を滑らしていけばいい、結び目にはテープまで巻いてある、ありがたい。

◎昔は、コースタイムの70%ぐらいで歩いていた、当然だと思っていたが、65歳ぐらいからどんどん衰えだし、今は、コースタイムの120~130%ぐらいもかかるようになってきたかな。危険印の場所は、気持ちが萎える、元々が高所恐怖症なのにますます拍車がかかってきた。ちょっとした段差も弱いね。若者の歩く姿が眩しい。

◎水平道は標高が1000Mぐらいかな、真夏の今日は蒸し暑い、陽の当たる場所はむっとするが、くると道が曲がりくねると、涼しい風が吹き抜ける、トンネルの中は肌寒いくらいだ。このあたり、谷が深く削られ、斜面が垂直に近い、下の川の水が遠くに見える。横の岩の奥鐘山1500Mの壁もくねくね曲がる度に、目の前にある。

◎水平道を修理する三人組の人たちが作業をしていた、丸太を、番線を運んでいる。「ありがとうございます」

◎3時ころ、なんだか空が薄暗くなってきた、「まさか 降ったら いやだねえ」向こうに白馬か唐松が見える。

◎展望台へ寄り道。向こうの高い山は唐松岳だそうだ。上で見たのは白馬かな。なんと反対側は、毛勝・猫又だそうで、なんだかわけがわからないね。そうこうするうちに本格的に降り出した、慌て、雨具を着、ザックカバーをかけ、カメラをなおした。下の鉄塔、さび色の鉄塔ながら、真っ白な碇子、碇子も新しいと真っ白なんだとしきりに感心。白磁を造る石田君が、白い石、日本碇子がたくさんもっていく、と言っていたのを思い出す。

◎祖母谷温泉まで20分と書いてある、帰ってきた、疲れた、腹が減った、まずは温泉だ、石鱈はないよな。

◎テント場に到着、12時間行動になってしまった、疲れきった、まずは風呂だ。魚の養殖池風温泉に入った、気持ちがいい、湯はどんどん流れ込んでいる、石鱈もある、ありがたい、身体をごしごし洗った。「さあ 飲むぞ」昨日はウイスキーがちょっとしか減らなかったで、たっぷり残っている、まずはウイナーソーセージを食いながらちびり、オカキを食いながらちびり、乾燥ワカメをたっぷり入れてラーメンを作った。腹が減っている、ウイスキーがほどよく効いている、どんなものも旨い。ひとりで話をしている、昔、白馬からここへ下ってきたSとKのお二人、水平道を同道したK、そして死んだやつから、生きてるやつまで勢ぞろい、いろんな話ができたねえ。夜空は曇っている、寝ている間に降るといやだねえ。

◎3日目の朝は6時に起きた。昨夜はウイスキーをたっぷり飲んで、9時ころに寝た。酔っぱらって一人でぶつくさ言っていた。たっぷり眠って気持ちがいい、湯を沸かしてカレーライス、コーヒー、茶とご機嫌な朝食だ。

◎「さあ帰ろう 河原で地獄を見よう 10時のトロッコにはまだまだ」と河原へ。小屋の親父が、「せっかくだから 入ったら 今 丁度いい湯加減になってるよ」ならばと、ザックを置き、タオルを取り出し、スリッパに履き替え、石ゴロゴロを流れの方に進んだ。大きな岩の左から熱湯が、右から川の水が流れ込んでいる、手で触ってこれなら大丈夫と裸になった。むろん360度まる見えだけれど、見る人もいない、ソロリ尻を浸けた。暑いやら、冷たいやら、ほど良い湯加減にご満悦の10分だった。小屋からすぐそばに湯が湧き出る温泉地獄、いつの時代にこれを見つけたのやら、ここは最高の場所だねえ。服を着て時間を見ると50分前、さあ帰ろうである。

◎今回の水平道散策計画は、いつも山に同道するA・Mさんが、宇奈月で温泉三昧をするというので、「乗せて行って」とお願いした。一日水平道を満喫できると出向いた。

玄侑宗久著<莊子>

南海の帝を儻（しゆく）と為し、北海の帝を忽と為し、中央の帝を混沌と為す。シユクとコツと、時に相（あい）い与（とも）に混沌の地に遇（あ）う。混沌これを待つこと甚だ善し。シユクとコツと、混沌の徳に報いんことを謀りて曰く、人みな七竅（しちきょう 7つの穴）ありて、以って独り有ることなし。（七つの穴で、見たり聞いたり食べたり息したりしているが、混沌にはそれがない。）試みにこれを鑿（穿）たんと。日に一穴うがつに、七日にして混沌死せり。応帝王篇

◎玄侑宗久先生かつてこれを読んだ時、シユクとコツが好意から一日一穴をあけ、七日続けたということは、一つあけるごとに混沌は次第に元気になっていったのだと思い込みました。六つ目が最も元気だったのではないかと。たとえば目の見えない人独特の耳のよさ、嗅覚のよさ、などというテーマにつながるかもしれません。使われなくなった脳の細胞が、他の機能の処理に使われ機能が高まるということがあるそうです。しかしここで語られているのは、五感の否定でもあります。

◎この混沌の話、面白いね。ただ玄侑宗久先生のように真面目くさって読むのはいかがなものでかえ、多分正しい理解の仕方、正当な方向かもしれない。中国の古典が日本に入ってきて 2000 ぐらい経っているのか、古代から近代までの大学者が、翻訳、解説し、おおよそ莊子という人はこういう人で、ここに書かれている内容はこうである、このように定説ができていないのかもしれない。

オレ、ちょっと曲解をしてみた。まず、帝というが、これは大人物のことなのかな、ならば、この大人物をやめ、そこらあたりのおっさん庶民、もっとふざけて、動物でもいい、いや、植物でも微生物でもいい。内容が不可解な、ABCの3人（モノ）がいたとして、この3人は仲がいい、常に話し、常に会い、常に認め合っていた。これが今どきの若モノなら、お互いが何をして、何を考え、何に燃えていた、なんて素直に言葉が出てくることだろう。若モノに限らず同じ時空を生きている、今風にいえば、「シェア」している仲間同士であれば、良きにつけ悪しきにつけ、共有共感する間柄だ。ところでこの、七つの穴、ふと考えて、自分の顔をふりかえると、耳・眼・鼻・口と七つある。下半身の穴は関係ないだろう、今の話には、とふざけてみた。この顔にある七つの穴を、五感、感覚のセンサーと捉える、見えない、聴こえない、話せない、などと常識的な発想をするのはいかがな、七つの穴がデザインであり、化粧であり、個性であると思うのは間違いか、ならば穴の数が七であろうが十であろうがどうでもいいということになっていく。この話で、二人の友が普通であり、もう一人のホストが、のっぺらぼうという発想に嬉しくなった。「のっぺらぼう」とは、「なにもない」に通じ、何も無いことの素晴らしさを感じる。二人の友が、友の徳に報いんと、穴を開ける発想、これがまた突飛で面白い。形あるものがその存在として、蠢いている、それこそ今の科学で発見され解明され、想像もつかない、「モノ」がいる。その、モノどうしが、電気信号なり、化学物質なりでそれぞれ交信する、想像するだけで素晴らしい世界じゃないですか。

◎料理人：丁（テイ）という料理人が牛を料理した。手が牛をつかみ、足を踏ん張り、牛を固定するとき、「houa」といった。舞うがごとく奏でるがごとく、彼の刀がうち叩く時、「houa」なる音を聞いた。王は感嘆の声をあげた。テイは言う。私は牛を目で見るのではなく精神で見ます。

◎車大工：公が本を読んでいる横で、扁（ヘン）が車輪をけずる。ヘン、「私が木を 削り 打ち付ける時 強弱の間をみつけ 心がそれに呼応します この技は教えられないので 死とともに持ち去ります」「あなた様を読んでいる聖人たちの話 それらも聖人たちの 滓にほかなりません」

◎孔子が滝を見ていた、ものすごい流れの滝である。男が泳いでいる。孔子は、死ぬぞと思いかげよった。「死ぬぞと思ったが 泳ぎの秘訣を話してくれ」「秘訣は持っていません ここで育ち 与えられた世界・天性・必然です」これを、「故・性・命」